

第10回世界遺産学習全国サミット in なら

世界遺産学習 —これまでの10年、これからの10年—

開催報告書

日程・会場：令和2年2月7日（金）・奈良市立飛鳥小学校
奈良市立都跡小学校
8日（土）・奈良教育大学

1. 目的

世界遺産学習に関する発表や優れた実践の交流を通して、教員の研修や市民への啓発の機会とする。また、世界遺産学習に関わる多様な人・分野・団体を結びつけ、新たな出会いを生むことで、世界遺産学習の深化・発展を図る。

2. 大会概要

① 7日：奈良市立飛鳥小学校での公開授業と交流会

飛鳥小学校では、自信をもって奈良のことを語ることができる児童の育成を目指し、地域に出かけ、ゲストティーチャーから話を聞くという活動を大切にしています。公開授業では4年生から6年生までの3つの学級で、そうした活動を報告する授業が公開されました。そのうち、6年生の公開授業「飛鳥スマイルキッズ」では、これまで学習してきたことの総括として、飛鳥地区で様々な活動をしておられる方をゲストティーチャーとして招き、地域に対する思いを聞くことで、自分たちには何ができるのか考え、学びを深めたことが発表されました。

交流会では、県外から来られた参加者より、「地域の遺産を題材にする際に、どのような視点で選んでいるかが参考になった。」などの感想をいただきました。また、長年世界遺産学習について研究されている奈良教育大学准教授の中澤静男氏からは、「6年計画で行っていることが大きい。子どもたちに自分たちの地域のよさを見る目が育っている。」と、飛鳥小学校におけるESDの視点を取り入れた世界遺産学習・地域遺産学習を高く評価していただきました。



② 7日：奈良市立都跡小学校での公開授業と交流会

3年生から6年生までの6つの学級で授業が公開されました。5年生の図画工作では、校区にある唐招提寺の千手観音菩薩立像に関する授業が行われ、「なぜ千本も手があるのだろうか。」「今の時代に千手観音菩薩立像をつくるなら、手に何をもちこたせるだろうか。」など、児童が鑑賞を通して学びを深めました。

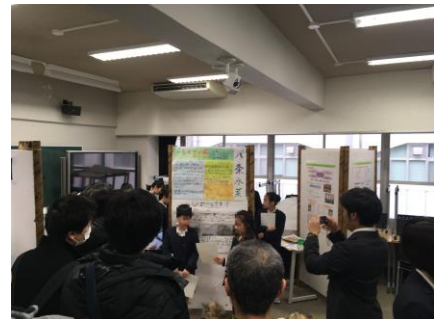


都跡小学校では、学校での日々の授業や種々の活動を、SDGsの視点から見つめ直すことにも取り組んでいます。世界遺産・地域遺産を切り口に持続可能な社会の創り手を育てるのだという学校の教育方針が表れた6つの公開授業でした。

交流会では、観光ボランティアガイドの方から、「学校でどのように世界遺産学習に取り組んでいるのかがよく理解できた。今後も連携をとりながら、子どもたちの学びをより良いものにしていきたい。」との感想をいただきました。また、長年、世界遺産学習について研究されている奈良教育大学名誉教授の田淵五十生氏には、「教師は何を知っているかとともに、どなたを知っているかが重要です。教師はファシリテーター役であることを再確認しました。」と、学習の様々な場面で地域人材を活用している都跡小学校の姿勢を高く評価いただきました。

③ 8日午前：ポスターセッション・模擬授業・展示発表・「おもてなし」

ポスターセッションでは、学校での学習を紹介する児童生徒や日頃の活動の様子を紹介するボランティアガイドなど、幅広い内容で40団体に発表いただきました。参加者は、発表者に対して積極的に質問をしながら理解を深めるとともに、今後の交流のために名刺や資料の交換を行うなどしていました。



模擬授業では、世界遺産学習の代表的な実践である「心で感じて、心で書こう」を再現した授業が行われました。若手教職員を中心とする参加者は、児童生徒をひきつけ、学習内容を自分のものとするためのポイントを学んでいました。



展示発表には、7つの企業や団体が参加しました。来場者からは、「学校だけでなく、さまざまな分野と連携して、世界遺産学習を行うことができると知り、今後は楽しみになった。」との感想をいただきました。

「おもてなし」では伝統文化の継承に関わる発表の場として、奈良市立富雄中学校茶道部と奈良市立登美ヶ丘中学校茶道部がお点前を披露しました。約130人の参加者が来場し、「堂々と発表している姿が素晴らしかった。」「中学生とは思えなかった。」等の感想が聞かれました。また、茶道部の指導者からは「生徒たちにとって、このような機会を得ることができてとても良かった。」などの感想をいただきました。

④ 8日午後：実践発表・対談

実践発表では、まず奈良市立平城小学校の4年生の児童が、「秋篠川の恵みを未来へ」の発表を行いました。児童は学校の横を流れる秋篠川について学習を進めていく中で、奈良時代と現在の秋篠川のつながり、自分たちの地域と世界の海の問題のつながりについて学びました。そして、秋篠川を未来に引き継いでいくためには何が必要かを考え、実際に行

動しました。これは身近なものを歴史的・空間的に捉えなおすことで現代的な諸課題について学ぶことをめざす、世界遺産学習のあるべき姿とも言える学習でした。そしてその学習の様子を生き生きと発表する児童の姿に、多くの参加者が感銘を受けました。

平城小学校の発表の後には、奈良教育大学名誉教授の田淵五十生氏、奈良教育大学准教授の中澤静男氏、世界遺産学習を学んだ卒業生二人が登壇し、これまでの世界遺産学習のあゆみや世界遺産学習の今日的意義、世界遺産学習が卒業生のキャリア形成にどのような影響を与えたかについて、活発な議論がなされました。

対談では、帝塚山大学客員教授の西山厚氏、NHK キャスターの新口絢子氏、奈良市の中室雄俊教育長が登壇し、これからの教育と世界遺産学習について語り合いました。「これからを生きる子どもたちにも地域に対する誇りをもってほしい。」と語る中室教育長に対し、西山氏は平城小学校の実践発表を例に「地域への誇りはその地域を守ってきた先人たちの思いを知ること、そして今の地域を支える人たちの思いを知ることによって自然と生まれるのではないか。」と応えました。



3. まとめ

今回のサミットでは、テーマを「世界遺産学習 ―これまでの10年、これからの10年―」とし、これまでの成果と課題を多様な人・分野・団体と共有することで、これからの世界遺産学習について考える場にしたいと考えました。

そうしたなかで、2日間で1,000人を超える参加者にお越しいただいたこと、これまでの世界遺産学習を振り返るとともに、現代の社会や未来を生きる子どもたちのための世界遺産学習について語り合えたことは、非常に意義深いことでした。

また、今回のサミットで児童生徒が学習の成果を発表する場面を多く設定できたことにも大きな意義があったと考えています。閉会行事の中で、奈良教育大学の加藤学長が「なぜ世界遺産教育ではなく、世界遺産学習なのか。それは常に主体は子どもであるからです。」と話されましたが、子どもたちが「もっと知りたい、もっと考えたい。」という思いをもつことで、主体的、対話的で深い学習が行われるという、いわゆる新しい学習指導要領で示された授業改善の視点が世界遺産学習にあったと改めて感じることができました。そして、このことは、1日目の公開授業から2日目の全体会にいたるまで、随所に感じられたことでもありました。

さらに、地域について学ぶことを通して、地域社会をつくってきた先人たち、そして現在活動する人々の思いに寄り添い、それを未来に引き継いでいくために自分は何をするのかを考え、行動しようとする学習内容の発表が数多くありました。世界遺産学習を通して地域への愛着や誇りをもった子どもたちが、「持続可能な社会の創り手」となっていくのだという強い期待を改めてもつことができました。

世界遺産学習がこれまでのあゆみの中で大切にしてきたものを引き継ぎ、今後も力強く推

し進めていくことが、子どもたちの豊かな学びと、一人ひとりの豊かな人生へとつながり、ひいては持続可能な社会の形成に寄与するのだと信じております。

今後も、世界遺産学習やふるさと学習、ESD・SDGs の取組を一層推進していくために全国の自治体・学校・企業・団体との連携を密に図ってまいります。

本大会の開催にあたり、発表者の皆様をはじめ、協議会会員の皆様の多大なるご支援、ご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

